

棚尾地区まちづくり事業

平成 27 年 8 月 20 日 (木) 19 時～

棚尾公民館 3 階

第 48 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行 (小笠原幸雄)

1 前回までのテーマに関する参考意見

昔の地名、酒造り、棚尾言葉、市章など

2 テーマ 77 「汐田行者堂」

説明 (磯貝国雄) 及び出席者による補足説明、感想など

3 テーマ 78 「森下不動尊」

説明 (磯貝国雄) 及び出席者による補足説明、感想など

4 テーマ 79 「中道地蔵尊」

説明 (磯貝国雄) 及び出席者による補足説明、感想など

5 一口テーマ (2) 「碧南で最初の信号機」

説明 (磯貝国雄) 及び出席者による補足説明、感想など

6 連絡事項・情報交換など

7 次回日程

(1) 第 2 回映像版「棚尾物語」製作部会

9 月 17 日 (木) 7 時 30 分から シナリオの編集作業 (第 2 回)

(2) 第 49 回棚尾の歴史を語る会

10 月 22 日 (木) 7 時から 「志貴荘」、「国勢調査記念石柱」

棚尾の歴史を語る会 テーマ一覧表

例 会	番号	テ　ー　マ	番号	テ　ー　マ
第 1 回	1	弥生の井	2	盆踊り
第 2 回	3	火の見やぐら	4	杉村修平
第 3 回	5	地震の記録	6	棚尾神楽
第 4 回	7	棚尾橋	8	源氏橋と棚尾港
第 5 回	9	達吉と棚尾	10	棚尾駅
第 6 回	11	棚尾村の瓦屋	12	加藤平五郎
第 7 回	13	棚尾村の村勢	14	棚尾の郵便
第 8 回	15	祝い事の食事	16	俳句の碑
第 9 回	17	俳句の隆盛		
第 10 回	18	大正天皇大嘗祭	19	役場高札舎
第 11 回	20	秋葉山常夜灯	21	道路元標
第 12 回	22	折戸の坂	23	東浦の分村
第 13 回	24	北棚尾村の分村	25	南極探検清水光太郎
第 14 回	26	中山の分村	27	若宮社
第 15 回	28	棚尾の地蔵尊	29	敬老会
第 16 回	30	大相撲清見潟	31	土人形
第 17 回	32	貝殻合わせ	33	区画整理
第 18 回	34	棚尾のお医者さん	35	民話小谷がつぼ
第 19 回	36	平岩種治郎	37	昔の棚尾小学校校舎
第 20 回	38	棚尾神社と忠魂碑	39	味淋造り
第 21 回	40	源氏と長田氏		
第 22 回	41	杉浦宗京の土風炉		
第 23 回	42	琴平社		
第 24 回	43	杉浦治助	44	光照寺弁天池
第 25 回	45	永坂奎兵衛と漢学	46	仏事の料理
第 26 回	47	大正～昭和初期の棚尾の活況		
第 27 回	48	チャラボコ		
第 28 回	49	棚尾の消防	50	名倉半太郎所蔵俳句短冊集
第 29 回	51	堀川の沿革	52	平和用水
第 30 回	53	青年団	54	鋳物業

例会	番号	テ　マ	番号	テ　マ
第 31 回	55	達吉のふるさと歌		
第 32 回	56	五代永坂杢兵衛と和歌		
第 33 回	57	矢作川と八村川	58	棚尾の農業用水
第 34 回	59	本村沿革記録		
第 35 回	60	八柱神社の奉納品		
第 36 回	61	水害の記録と排水路		
第 37 回	62	棚尾の農業		
第 38 回	63	安専寺と安藤圓秀		
第 39 回	64	達吉の歌碑		
第 40 回	65	棚尾中学校		
第 41 回	66	棚尾の塩田		
第 42 回	67	八柱神社の建造物		
第 43 回	68	春日社	69	おはま平七郎物語
第 44 回	70	新田の開発	71	長富公園
第 45 回	72	棚小校庭の造営物	73	棚尾の橋
第 46 回	74	昔の地名	75	酒造り
第 47 回	76	棚尾言葉	(1)	碧南市章
第 48 回	77	汐田行者堂	78	森下不動尊
	79	中道地蔵尊	(2)	碧南で最初の信号機
第 49 回	80	志貴荘	(3)	国勢調査記念石柱

「汐田行者堂」

1 要旨

汐田町 5 丁目の方通行道路沿いに行者堂があり、汐田町町内会が管理している。お祀りされているのは修驗道の始祖である役行者（えんのぎょうじや）で、奈良県の大峰山が本山である。祭礼は 5 月に行者祭、8 月に地蔵祭、正月の年越し行事が催される。

又、5 月の例祭には併せて前年度物故者の法要が営まれる。法要軸の法名で最も早い人は明治 42 年の忌日が記されている。このような地区の物故者法要は、棚尾地区の多くの組で行われていた。

2 行者祭

(1) 本尊

拝殿に接続する本堂には、真ん中に木造の行者像（高さ 40cm×幅 18cm）が安置され、右脇に青い童子像、左脇に同じく赤い童子像（いずれも高さ 12cm、幅 8cm）が控える。

(2) 例祭

5 月の第 2 日曜日午前に斎行される。境内の縁台には小さな釈迦像が据えられ、甘茶や花見だんごの接待がある。

3 行者講

(1) 行者堂の創建については今回の調査では不明であった。拝殿に参詣記念の写真が一枚掛かっている。白い参詣装束の男の人 20 名が写っている。上着の襟と手に持った麦わら帽子には「碧南汐田組大峰山参詣」と書かれている。昭和二十年代と推測され、顔から氏名の分かる人もみえるがいずれも故人である。

(2) 小笠原國雄氏の話

昭和 33 年 8 月に汐田組の大峰山参詣に同行した。当時 25 歳で一番若かった。一緒に行ったのは斎藤俊助、亀島兼松、加藤濱太郎、杉浦栄治郎、杉浦實一、の 6 名だった。

碧南駅から電車に乗って、名鉄、近鉄と乗り継ぎ、12時頃に奈良県西吉野地方の洞川に着いた。すぐ登り始め、夕方6時頃に大峰山山頂の宿坊に到着した。次の日は同じ道を下り、高野山をお参りして宿坊に泊まった。帰りは壇坂寺などを巡り帰った。

(3) 大峰講、吉野講

出典：碧南市文化財第9集「碧南風土記抄」平成7年発行

「江戸時代中期より寺社の勧進と庶民の願いごとが相俟って、様々な講を組んで信仰とのしみも込めて旅行することが庶民の間に流行した。思いつくままに講の名を挙げると伊勢講、多度講、善光寺講、立山講、秋葉講、春野講、豊川講、御岳講、吉野講、大峰講、熱田講などがある。……」

4 物故者法要

(1) 法名軸

行者祭には汐田町町内会の前年度物故者法要も行われる。法要は物故者の遺族が参列し浄土真宗の形式で行われる。この日には、法名を書いた掛け軸が出される。最初の物故者は、右上に「明治42年、榎原清市、生田小左エ門」と書かれている。毎年、物故者が追加されるので、現在の掛け軸は3本目である。

のことから、法要が始まったのが明治42年頃始まったと思われる。又、汐田の土地は明治中期以前には田畠ばかりで、明治後半から人家が出来始め、それに伴なって汐田組が結成されたと推測される。

(2) 他の組の法要

こうした組の法要は棚尾地区の多くの組で行われていた。私の記憶でも、戦後二十年代であるが、大人から子どもまで組長さんの家に行って、よばれた思い出がある。又、現在でも法要は行われていないが掛け軸の残っている組もある。

棚尾の歴史を語る会 テーマ 78

「森下不動尊」

1 要旨

少し前まで、八柱神社の西に不動尊が祀られていた。8月28日が縁日で、家々に嗜好をこらした『飾りもん』が出され大変賑わい、棚尾の夏の風物詩であった。字森下の有志の人達が管理していたが、運営が困難になりお堂は妙福寺に移された。

2 お堂の位置

最初のお堂は排水路の上で、角吉さんの西あたりに祀ってあったそうである。その後、弥生町4丁目にお堂が建てられた。永年、森下の有志の人達が祭りを斎行していくが運営が困難になり、現在は妙福寺境内の西に並ぶお堂の一番北に移られた。

3 不動尊像の言い伝え

本尊の不動尊像には、次のような言い伝えがある。今は源氏橋から南へ向う幹線道路の下になって姿を消した江川が、塩田や船運で利用されていた頃、衣浦の海から満潮の流れにのって一体の不動尊像が森下地区を流れる江川へ漂着した。それを見つけた森下地区の人々が、この不動尊像を自分達の守り仏として敬い、大切に祀った。



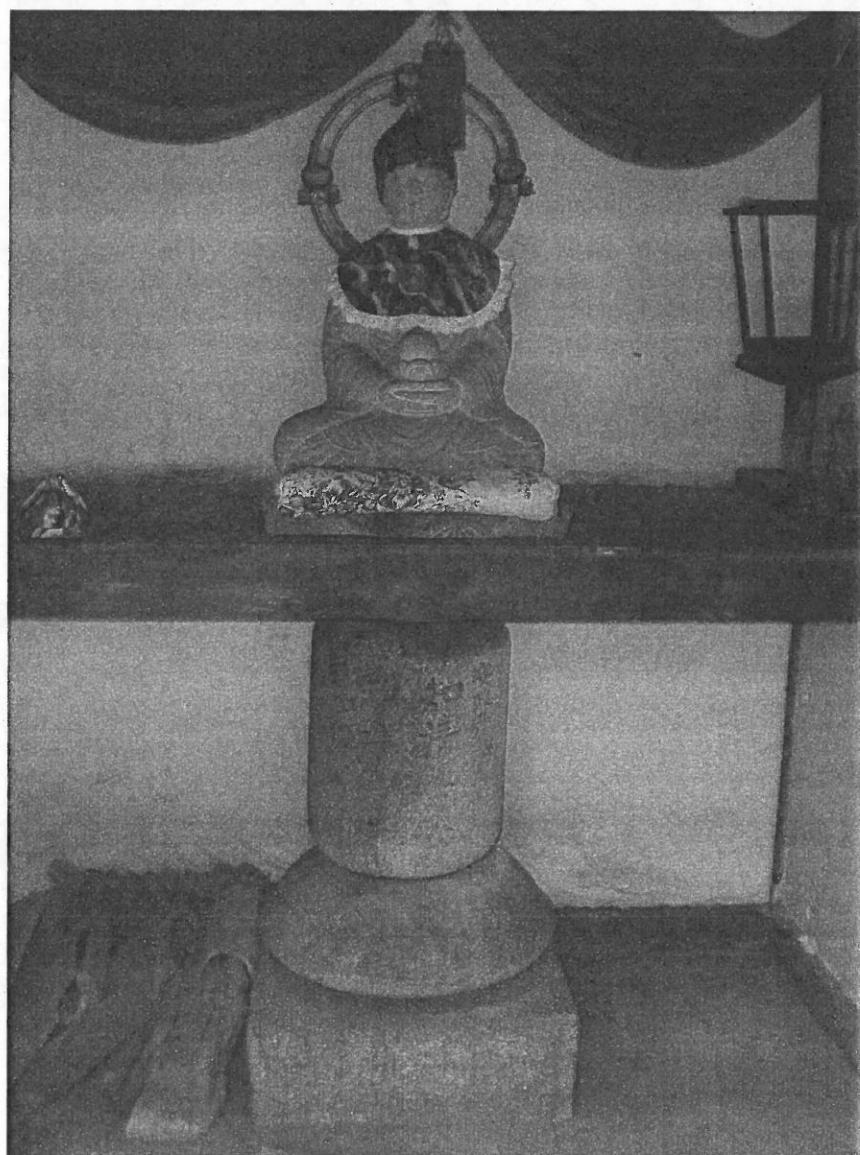
棚尾の歴史を語る会 テーマ 79

「中道地蔵尊」

1 要旨

棚尾本町1丁目に中道組地蔵尊がある。石仏の台座に「安政五年（1858）二月廿七日 知清童女 知秀童子 明治七年（1874）六月 四代目榊原七兵衛」と彫られている。榊原家のあった中道組の人は代々守り仏として大事に祀ってみえる。

2 石像調査



3 榊原家

(1) 四代榊原七兵衛 天保4年7月11日生まれ

妻 のや

男子 嘉太郎 安政5年生まれ

二女 よう 慶應元年8月20日生まれ 明治27年1月28日に永坂正勝ト内証
酒

三男 弥太郎=後に五代榊原七兵衛 明治2年7月12日生まれ 明治36年7
月5日没

(2) 歴代棚尾村村長

明治15年3月10日～明治16年3月5日 四代榊原七兵衛

明治30年11月5日～明治31年8月11日 五代榊原七兵衛

在任中：中山の棚尾からの分離問題
の解決及び少学校を妙福寺から春日
への移転を決める。

明治32年5月26日～明治32年8月20日 同

明治35年10月17日～明治36年5月12日 同

(3) 歴代氏子総代

明治10年 同11年 同14年

明治20年 弥太郎 祠掌

明治22年～26年 弥太郎 祠官

(4) 永坂奎兵衛の手帳史料 明治27年1月28日

「父（正勝）、棚尾村榊原七兵衛ノ女ヨウト婚姻ノ事決シ、此夜内証酒ヲ為ス。」

4 地蔵祭など

第15回例会のテーマ28「棚尾の地蔵尊」に掲載。

棚尾の歴史を語る会 一口テーマ2

「碧南で最初の信号機」

1 要旨

交通信号機は現在市内に約 220 機あるが、最初の信号機は今から 52 年前の昭和 38 年（1963）4 月に棚尾小学校前へ設置された。棚尾仲よし子ども会の世話役を長年勤められた源氏町の山本幸一氏は交通安全など子ども会活動に熱心に取り組まれた。

2 棚尾仲よし子ども会

(1) 碧南市史第三巻（昭和 49 年発行）から抜粋

本市においても昭和 35 年には 5 つの子ども会が登録されている。中でも 30 年に作られた「棚尾仲よし子ども会」はよき指導者に恵まれて活発な活動をみせた。38 年には碧南市子ども会連絡協議会が結成され、子ども会の健全育成に努めている。尚、「棚尾仲よし子ども会」の指導者山本幸一は、結成以来 17 年間にわたる活動特に交通訓練や小学校前交差点における交通整理などの功績により 47 年に総理府長官、48 年に内閣総理大臣より表彰を受けた。

(2) 碧南市史第四巻（平成 10 年発行）から抜粋

碧南市における子ども会の結成は、棚尾仲よし子ども会が初で、昭和 30 年であった。

以下省略

表 碧南市の子ども会加入状況

年 度	団体数	会員数	加入率
昭和 37 年度	17	3, 343 人	27%
平成 7 年度	32	3, 687 人	74%
平成 25 年度	26	3, 588 人	81%

3 交通信号機の点灯時間

尚、当時の信号機点灯時間は終日ではなく、朝 7 時に点灯し、夜には消された。

歴代棚尾子ども会 役員名簿

年度	世話役				
昭和56	山本 幸一 永坂 勝				
昭和57	山本 幸一				
昭和58	山本 幸一				
	会長 副会長以下の三役				
昭和59	梶川 浩	鈴木 岩雄	中川 教子		
昭和60	杉浦 元	榎原 岩雄	梶浦 正雄		
昭和61	杉浦 和正	斎藤 太志	斎藤 彰子	多田 幸治	
	佐野千賀子				
昭和62	外山 康雄	井上 武久	斎藤 淑子	榎原 逸夫	
	斎藤美和子				
昭和63	榎原 周治	長田 統子			
平成元	可知 茂	長田 治夫	杉浦美千代	生田 小葉	
	長崎 信司				
平成2	矢島 大造	加藤 由身	杉浦 幸恵	古久根幾代	
	榎原弥太郎				
平成3	斎藤 洋右	長田 正人	坂部 恵	竹田由紀子	
	斎藤 保				
平成4	三島 時男	金原多美子	永坂 直義	石川二三代	
	杉浦千鶴子				
平成5	小笠原 宏	長田 昭則	小澤 春恵	竹田貴美子	
	三島 孝二				
	多田きよみ				
平成6	永坂 直義	小幡 哲資	多田 光孝	石川 恵子	
	杉浦 坂代				
平成7	高須 恒彦	永坂 邦男	永坂 峰広	井上 樹里	
	住谷 栄子				
	小笠原千代子				
平成8	杉浦 隆博	杉浦 貞宏	斎藤 照久	平田 妙子	
	角谷 智美				
	小笠原恵子				
平成9	小笠原憲一	小澤 昇	榎原 武久	石川 里美	
	中野真裕美				
	有永 慈子				
平成10	三島 和人	小笠原義仁	三島 仙吉	多田美夕紀	
	杉浦 智子				
	生田 幸美				
平成11	鈴木 良彦	永坂 匡	斎藤 孝司	平岩 久美	
	榎原さと子				
	小笠原清美				

平成12	石川 秀仁 名倉 康裕 小笠原清美	長田みゆき 森田 真美	生田 智
平成13	永坂新太郎 井上 雅樹 池田 利裕	杉浦 彰 石川 初美	金原 陽子 稻生恵美子
平成14	杉浦 堅吾 斎藤 利康	杉浦 徹 都築 裕子 清水 由香	小笠原増美
平成15	金原 一平 名倉 博美	杉浦 義雄 鈴木 清美	斎藤 明充
平成16	杉浦 忠幹 永坂 香澄	小笠原勝利 鈴木 正樹	加藤 育 榎原 成子
平成17	斎藤 秀敏 井澤由紀子	永坂 一仁 木村 邦光	斎藤 尚子 斎藤 憲子
平成18	名倉 良能	古久根賢博 古久根幸代	広田みゆき 鈴木 康弘
平成19	岩間 一浩	長田 勇久 恒松 淑子	東端 裕美 小澤 敦子
平成20	鈴木 政利	奥谷 正毅 高松 順子	岡田 利江 岩本 康晴
平成21	永谷 充春	杉浦 力 鈴木 伸枝	亀山 知美 鈴木 孝信
平成22	名倉 孝昭	斎藤 勘治 杉浦 宣子	磯貝 祐子 石川 理佳
平成23	永坂 斎	井上 裕二 禰宜田知美	小笠原佳代子 榎原 享子
平成24	小笠原和英	鈴木 直樹 岡本 友美	榎原 真澄 生田 雅秀
平成25	都築 英治	杉浦 秀一 杉浦 雅子	中村かつら 磯貝 哲也
平成26	禰宜田達也	石川 亮治 竹内久美子	河本 博巳 榎原 猛
平成27	磯貝 文香	神崎 裕也 荒木 亜紀	石塚 静 石川 亘
			榎原 幹敏 角谷満千子